

## 聖書 箴言3章13〜20節、ヨハネ福音書10章31〜42節

本日のヨハネ福音書の個所で、ユダヤ人たちは一気にイエスを石で打ち殺そうとして、『石を取り上げた』（31節）とあります。場所は、ソロモンの回廊で、エルサレム神殿を取り囲む外周の壁に当たります。23節に「神殿の境内で」とあるように、実際の舞台は、この回廊に囲まれた広場だったようです。そこは異邦人の異邦人の庭と呼ばれていた所なのですが、ユダヤ人はこの「異邦人」という言葉を言いたくはなかったのでしょうか。いずれにせよエルサレム神殿の境内の一隅で、ユダヤ教の指導者たちは、イエスを取り囲んで詰め寄っていたのです。

どうしてユダヤ人の指導者たちはイエスのことを石で打ち殺そうとしたのか。それは3節を見るとわかります。イエスは父なる神によって多くの善い業を行ったのに、ユダヤ人の指導者たちは、「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒涇したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としている、と、その理由を指摘しています。人間なのに、自分のことを神だと偽っているというのです。

これでは、イエスと正確な対話は成立しません。それに対してイエスは、聖書の言葉を通して、ユダヤ人の指導者たちを説得しようとしています。37節以下で、イエスは「私を信じなくても、その業を信じなさい」と、最大限の譲歩をしています。9章で生まれながらの盲人を癒す業をなしたイエスの様子をユダヤ人たちは見ていたのに、それを神の業として認めなかったのはユダヤ人たちでした。彼らは、その癒された男を追放したのです。

イエスとユダヤ人の指導者たちの問答は、ソクラテスの問答のようです。ソクラテスが行った対話のスタイルは、例えば、「善いとはどういうことか」と問うた時、賢者とされる人は「困った人を助けることが善いことだ」と答えたとします。しかし、ソクラテスは、「善いとは何か、の答えになっていない」と反論します。なぜなら、困った人を助けることは、善いことの一つの事例に過ぎない。ソクラテスから問いを突き付けられた賢い人はいろいろなことを知っていると思われて居る人物だったのですが、この問答を経験したことでソクラテスは「自分が他人と違って「知らないこと（無知）」を自覚している方がましであることに気づくのです。これがいわゆるソクラテスの「無知の知」とされるものなのです。ここには強烈なアイロニーが潜んでいます。

自分は知らないのに、教えてほしいと相手に言いつつ、賢者とされる人に質問を浴びせかけ、結局は、彼らが何も知らないことを暴き出したのです。ですから、ソクラテスは、自分の問答法によって、自分自身の死刑を招き寄せたと言えるのです。有名なソクラテスの言葉である「悪法も法なり」と言って毒杯を仰いだのは、この信念によって生まれたのです。イエスとユダヤ人の指導者たちとの問答を見ると、イエスが問答によって真理を明らかにしようとしていることがわかります。と同時に、このように、当時の知識階級のユダヤ人指導者たちとの問答によって、自ら死刑になっていく道をソクラテスと同じように歩むことになったのです。ソクラテスは賢者と言われる人たちとの問答で、相手に「無知の知」の自覚を促したことで、反感を買って死刑の宣告を受けることになったのです。私たちの実際の社会活動で、もし、相手に無知の知を突きつけたら、ほぼ100%嫌われま

す。

ユダヤ人の指導者たちは、この問答の結果、石打ちで殺すことを諦めました。ローマ帝国への反逆という重罪によって十字架で処刑されるという筋骨きに変更します。この時代の世界を支配していたのは、ローマ帝国です。そのローマ手国の力によってイエスを葬り去ろうとしたのです。ユダヤ人の指導者たちは、エルサレム神殿の境内で、律法違反によってイエスを殺そうとしたのですが、彼らは自らの無知をさらけ出してしまったのです。ですから、ローマ帝国への反逆罪でイエスを葬り去ることに方向転換したのでした。

ユダヤ人の指導者たちは「人間なのに、自分を神としている」ということを冒涇だというのであれば、ここに明確に登場してきませんが、神が人間となられたことは、神にとつてどれほどの屈辱的なことだったのでしょうか。そういうことが連想できなくなっていたユダヤ人の指導者たちは、神と自分たちとの関係性について真理がどこにあるのかということに思い至らなかつたのです。もし、ここでのイエスとの問答でイエスが神の子である(36節)という言葉の真理を、自分詩人の無知の知の自覚を抱いていたならば、イエスが神から遣わされた神の子であるという言葉に、神の子と発言していたことを単純に律法違反と決めつけないで、神が人間才姿としてこの世に派遣されることが、いかに神にとつて屈辱的なことなのかを創造することすらできなかったのです。

「無知の知」に自分がとどまっていたことに、ユダヤ教の律法に詳しい指導者たちが気づいていたならば、神の御旨をイエスと共に捉えることができていたと思います。

現代に生きる私たちキリスト者も、聖書の御言葉を単純にうのみにするのではなくて、無知の知に自分がとどまっていることの自覚に立って、イエスの言葉を吟味しなければ、自分が神の意志がどこにあるのかということに思い至らない事態が起こりうるのです。

自民党の総裁選びで日本各地において候補者たちが発言をしていますが、先日、大学生が奨学金を40歳まで払わなければならぬことに不安を感じていると発言したのに対して、小泉進次郎さんが、「大学に行かない選択肢もある」と発言して、私はひっくり返るほどびっくりしました。大学生の奨学金返済は市中金利よりも高い金利をかけて奨学金の返済をしている現状に対して、「奨学金を国が肩代わりする方策を検討します」と返答すればよいのに、本当にずれていると思えました。確かに日本食の調理人が海外の一部ですが重宝されていることを念頭に置いた発言でしょうが、無知の知を自覚していないから起こつたと思われます。

イエスは律法の専門家と自覚しているユダヤ人の指導者たちとの問答で、彼らの無知を暴きました。彼らは盲人の癒しの業が神の業であることに気づくことがありませんでした。イエスを通して現わされた神の業の根底には、神が人間にへりくだるという神の立場に立てば、屈辱的な選択をあえて行ったからこそ、盲人の人が癒されるといふ驚異的な業がなされたのです。このように神が敢えて人間としてこの世に来られたからこそ、神の意志が障碍を持っている人々を癒す業が成就したのです。この神の御旨に生かされて、今週も神と共に生きていきましよう。